

# タイ語文献と古本屋事情

村嶋英治

タイ語文献を本格的に集め始めて七年になる。この間、三年余をタイ国で過ごしたが、その週末のほとんどもを古本集めに費やした。これまで集めたタイの古本は、歴史、政治、経済、社会関係の文献を中心に一万冊近くになった。

このように古本集めに相当情熱を注いできたが、これはマニア的関心というより、タイ研究上の必要に迫られたことが最大の理由である。また印刷された本なら何であれ値段を心配することなしに買うことができるというタイにおける古本の安価さがこれを可能にした大きな条件である。

## ●タイ語文献収蔵の不備

タイ社会についての研究に着手した者が、先ずつき当たり、相当長時間をかけないと解決できない問題は文献の不備である。十九世紀半ば以後今日まで、膨大な数量のタイ語文

献が印刷されているにも拘らず、これを利用できる場所はタイ国内の二、三の図書館に限られている。しかも、これらの図書館の蔵書も決して十全とはいえない。とりわけ、一九三二年立憲革命後二十年ぐらいの印刷文献の多くは、これらの図書館にもはいっていない。眼をタイ国外に転じると、近現代のタイ社会研究では日本より一日の長がある米国でもタイ語文献を豊富に所蔵する図書館はないようである。タイ研究の一つの中心地コーネル大学の蔵書カタログをみても驚くほどの内容ではない。

日本についてみると、アジ研図書館におけるタイ語新聞や官報、統計書の収集という貴重な蓄積はあるが、総じて一層貧弱である。東京では本棚四、五本分のタイ語本をもつ図書館は四カ所ほどあるが、これのみを使って何か内容のあるタイ研究の論文を書くことは不可能であろう。このため、タイ研究者の最

初の仕事は文献収集にならざるを得ないのである。そしてその文献収集もタイの図書館にいけばこと足りるというものではない。前述のようにタイの国立図書館やチュラーロンコーン大学図書館などのような最大の蔵書をもつ所でも、所蔵していないタイ語本が無数にあるのであるから。

## ●古本は故紙扱い

総じてタイの知識層は書物を所蔵することにそれほどの価値を与えない。まして古くなった本となると紙屑同然の扱いとなることが多い。古本屋でタイ人が値切るときにせりふは「ガール・レウー(もう古くなって)」であることからみても、古くなればなるほど価値は減ずると一般に考えられているのである。古本を売る方も「一キロいくら(チャン・キロ)で故紙として買ってきて、その中から故紙よりはいい値段で売れそうなものを古本として売っている場合が多い。

古本集めを生業とする者はこのように自分の足で民家を廻って「故紙」として古本を集めるとともに、その一方では故紙回収業者の倉庫に入つて、古本として売れそうなものを集めてくる。このような古本集め人はバンクコクで(ということ)はタイ国全体で(ことだが)

五〇人くらいであろう。

彼らの多くは一九八三年まで自らの店をもつことができず、人の集まる所、たとえば仏日や休日のマハタート寺境内やサナムルアン(王宮前広場)、あるいは夕刻中国人街のサムエークで露店売りをするか、もしくはタイにおける古本屋の集合地(といっても最高裁判所横のバンコク都内の土地の上に二メートル四方の古本小屋を四〇ぐらい建てたものにすぎない)にある古本屋の主人に売るしかなかった。この古本小屋は、毎日一〇時頃から日没まで開いているが、とくに土曜日の朝は古本屋の主人や家族がその週に自ら集めたものや先述の集め人から買い入れたものを一斉に売りに出して、常連のマニアが押しかけていた。しかしこのおなじみの光景も、八三年にチャトチャク公園にサンデーマーケットが開かれ、店をもてなかつた集め人たちがこの公園で店を開き、自ら集めた古本を自分で売り捌くようになると、なくなつた。

以上のような経路で集められ、幸運にも古本市場に出てくる書物を除けば、多くの書物は再生紙になつたり、菓子や果物を売る小売り商の紙袋の材料になつたり、あるいは湿気の多い家の片隅で白アリのエサになつたりしている。それに加え、数十年に一回位の割で

バンコクを襲う洪水は多くの書物を台無しにしてしまう。このような人災・天災によつて貴重な文献も日々姿を消しているのである。言うまでもなく、この消滅を許しているのは古本あるいは歴史的文献にタイ人がそれほどの価値を認めないことに由つている。当然古本を扱う商人の生活も貧しい。最高裁判所横の古本小屋の主であれ、チャトチャク公園に新たに店を開くことができた集め人であれ、

彼らは皆中国系タイ人で、ほとんどがトンブリーの長屋の住人である。わずかの資本でその日暮らしに近い生活をしているから、本の内容がわかるほどの学のある人はこの商売にはいない。内容を見ず本の大きさや厚さで一〇から三〇バーツ(昨年までのレートでは一〇〇円〜三〇〇円)ぐらいの値段をつけて売れるものから売っていくのである。古本のカタログなどつくるうはずもない。

### ●買手側の苦心とルート

買う方に見れば、どんな本があるかはその場にはいかないとわからない。何か特定のタイトルの本が欲しくとも在庫があるわけがないから、とにかく出てくるまで時間をかけて何度も顔を出す以外に方法はない。

いつも古本屋に通うだけの時間がない人や、

外国人に売ることを目的に、古本屋で本を買集めている人も五、六名いる。彼らが筆者の最大の競争相手である。そのうちの一人はサパーンレックに店を構えている。彼にはこれまで何人かの日本人研究者が世話になつている。また別の二人は最近で、きたセントラルプラザの中に店をもっている。

この他にも、店はもたないが、何人もから注文をうけ本を探している常連が二、三名はいる。彼らのある者は、仕入値の数十倍の値段で資金豊富な外国の大学に大量に売っている者もいる。しかし古本屋で買うときは徹底して買い叩くから、古本の相場にはそれほど影響は出てこない。

筆者は多くの場合古本屋の言い値に近い額で買うため、上得意の部類である。筆者が買いたいような本があればとっておいてくれる古本屋も多い。それで比較的短期間のうちに相当数の古本を集めることも可能となつた。また筆者が外国人であることによる安心感からか、何人も古本屋からその自宅によれば、「秘蔵」してきたという古書を買うことができた。ある集め人からは、古書マニアの倉庫から盗み出された三〇箱分の古書売りつけられそうになつて、困つたこともある。